

Proposals for Study Groups Working to Promote Art Appreciation Lessons

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-03-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 濱口, 由美, HAMAGUCHI, Yumi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/3067

鑑賞学習を推進するための授業研究会への提案

—徳島県立近代美術館鑑賞シート活用授業研究会の取り組みを通して—

Proposals for Study Groups Working to Promote Art Appreciation Lessons

—Based on a Research Group's Efforts Processing Worksheets at the Tokushima Modern Art Museum—

濱口 由美^(*)

HAMAGUCHI Yumi

(2010年9月30日 受付)

I. はじめに

鑑賞教育の重視が謳われるなか、学校現場における鑑賞学習の教育普及にも美術館が連携して取り組んでいる事例は多い。なかでも世田谷区内の全ての小学校4年生が展覧会に訪れるという「美術鑑賞教室」を20年以上も実施してきた世田谷美術館は、そこで培った教育力を学校現場の中にも還元している。東京学芸大学の学生たちと共同開発してきた出張授業プランは、すでに100以上もあると言われている。毎年、世田谷区にある八割以上の学校からの出張授業要請があることから、その授業内容の充実ぶりが伺える。教員自身が展覧会と関連づけた授業実践に取り組むときは、教材として使用できる資料の授業案のサンプルを提供するなど、個々の教室に応じた鑑賞学習指導のサポートにも取り組んでいるそうである。¹⁾

また、学校の授業で活用するための鑑賞教材開発研究会を教員らと組織し、そこで作成された鑑賞教材や指導資料も多くの美術館から発行されている。岡山県立近代美術館国吉康夫教材開発研究会で作成された「美術鑑賞ガイド」²⁾などはその好例であろう。実践事例を基にした授業案に、丁寧な手ほどきが記されており、初めて鑑賞学習に取り組む教師にとっても有益な指導資料として重宝されているのではないかと思われる。このように、学校での鑑賞学習を充実させていくための教材開発や授業研究が、鑑賞教育を常に主導してきた美術館と連携を持ちながら、全国的に広がっているといっても過言ではないであろう。

しかし、徳島県立近代美術館「鑑賞シート活用授業研究会」のように、すでに美術館から発行されている教材をもとにして、鑑賞学習の目的や課題を教材研究や実践報告から共に探っていこ

*福井大学教育地域科学部芸術保健体育講座

うとする教員と学芸員の共同研究会は少ないのではないかと思われる。本研究は、教員と学芸員がコミュニティを創造しながら取り組んできた「鑑賞シート活用授業研究会」のこの独自のな活動に着目して取り組んだものである。

II. 研究に至る問題意識と目的

柴田豊和は、鑑賞教育の一つの現実を「熱気と戸惑いが相反する不思議な状態」と表し、「鑑賞教育再考」を論じる際に、鑑賞について研究者たちの周囲に立ちこめる熱気と学校現場との空気の落差を指摘した。³⁾

言うまでもなく、鑑賞教育への戸惑いが渦巻いているのは学校現場である。もちろん、学校現場でも鑑賞教育を推進しようと積極的に取り組む教員は増えてきている。しかし、たくさんの鑑賞方法や鑑賞教材が研究されているにもかかわらず、いまだにどのような方法で取り組んだらよいのか分からない教師が多いのも事実である。山木はこういった現状に対し「小学校における造形遊びと同じく、教師自身が小学校の図工の時間で鑑賞の学習をしたことがないことに由来している」⁴⁾と述べている。では、どのようにすればこの鑑賞教育ブームを裾野にまで広げていくことができるのであろうか。

少し前の資料になるが、日本美術教育学会研究部による「図画工作科・美術科における鑑賞学習指導についての調査」⁵⁾ 報告書にその打開策を求めてみたい。まずは、小学校教員の鑑賞学習指導への取り組み姿勢から見ていきたい。「図画工作科の学習指導への取り組み」において「積極的である」(42.5%)「やや積極的」(50.1%)と9割以上の小学校教員が前向きであると答えているのに対し、「鑑賞学習指導への取り組み」になると「積極的である」(8.1%)「やや積極的である」(41.9%)と5割にまで減少している。さらに、「鑑賞学習指導に消極的と回答した場合の理由」を見てみると、「授業時数が少なくて鑑賞に充てる時間がとれない」(78%)ことが約8割と群を抜き、「近隣に美術館などの会場や施設がない」(49%)「鑑賞の教材研究をする時間がとれない」(35%)「鑑賞に関する知識が乏しい」(37.7%)と続く。しかし、「鑑賞学習を進めるために必要な改善」の問いに対しては、「授業時数の確保」(42.5%)や「美術文化施設の充実」(21.3%)よりも「鑑賞の学習指導に関する現職教師の研究・研修」(47.8%)をもっとも必要なものとして捉えている教師が多い。このことは、授業時数の増加や美術館の設立といった外的な改善策を待つより、自らの研鑽を重ねることで鑑賞教育を充実させていきたいと考える教師たちの意欲と現実的な要望と読み取ることができるのではないのだろうか。それならば、このような教師たちの要求に応えるような「鑑賞教育の研究・研修の機会」を設けることが、鑑賞教育への戸惑いを払拭し鑑賞教育を進めるための活路となるのではないだろうか。

徳島県立近代美術館鑑賞プロジェクト⁶⁾は、「シーがeるた・アートスクール」と呼んでいる鑑賞教育推進のための「鑑賞シート活用授業研究会」を毎年開催している。筆者は、この「シー

「シーがえるた・アートスクール」で展開している実践について整理と検討を行うことは、「鑑賞学習指導に不安を抱える教師の研究・研修」の指針を計画する上でいくつかの示唆を与えられる意義あるものになると考えている。それは、「シーがえるた・アートスクール」における実践的研究活動が、鑑賞学習指導経験の少ない小学校教員の参加によって創造的に進められてきたからである。

本論では、「シーがえるた・アートスクール」での活動内容を整理しながら、鑑賞学習指導の力量形成のために教師と学芸員がどのようなコミュニティを創造してきたのかを考察する。

Ⅲ. 「2006 鑑賞シート活用授業研究会」からの課題

「シーがえるたアートスクール」は、徳島県立近代美術館鑑賞教育推進プロジェクトが実施している「鑑賞シート活用授業研究会」の愛称である。「シーがえるたアートスクール」と呼ばれるようになったのは、第2回の「鑑賞シート活用授業研究会」からである。これは、教師たちが校種や学年を限定しない「子ども」という立場で参加するという独自の研究会スタイルを象徴する愛称であると言えよう。このような研究会スタイルの発想は、研究会の企画者たちを「けろり塾長」「ケロ先生」といったニックネームで呼び合うことなども含めた、休日の楽しい自主研究会といった外見を装うための演出でもある。しかし、この愛称には、第1回の「鑑賞シート授業研究会」の反省から託された「教師と学芸員との学び合いの場にしよう」というもっと根源的なねらいが込められているのである。

表1 第1回 鑑賞シート活用授業研究会

実施日	2006年7月21日	
会場	徳島県立近代美術館	
学習者	徳島市富田小学校1年1組(25名)	
授業者	徳島市富田小学校教諭	濱口由美
	徳島県立近代美術館学芸員	竹内利夫
日程	9:30~9:50	受付
	9:50~10:30	公開授業Ⅰ(3Fアトリエ)
	10:30~10:50	移動
	10:50~11:35	公開授業Ⅱ(2F 所蔵作品展示室)
	11:35~11:50	休憩
	11:50~12:40	研究協議
参加者	保護者等27名	
	教員49名(研究協議参加者30名)	

第1回目の鑑賞シート授業研究会(表1)は、徳島県立近代美術館鑑賞プロジェクトで開発してきた鑑賞シートを学校現場に普及させる目的で、2006年7月21日に実施された。授業者の濱口(筆者)と竹内は、ともに鑑賞シートの開発者である。学習者は、徳島市富田小学校1年1組児童、当時筆者が担任していた学級の子どもたちである。公開授業では、クレー鑑賞シートに込めた「線と色でおしゃべりしよう」というねらいを「作品なぞなぞ」という鑑賞遊び⁷⁾を通して具現化し、教室から美術館へ連動していく子どもたちの活動の様子を見てもらうことができた。

研究協議では、授業の感想や鑑賞教育に巡る質問などが話題に上ったが、今回の公開授業をもとにそれぞれの教室における授業実践へつなげていくような話し合いへと発展していくことはなかった。教員の参観者が50名近くもいたにもかかわらず、研究会後、鑑賞シートを活用して授業をしたと言う報告がほとんどなかったことから、この授業研究会だけでは鑑賞学習指導への意欲を喚起させるまでには至らなかったと思われる。

鑑賞シートの確実な普及を目指し、その最良の方法として、第1回鑑賞シート活用授業研究会には、公開授業を組み込んだ。しかし、今回の研究会を反省する中で、企画者たちは教師たちの実践への意欲につなげることができなかった一番の原因がここにあるのではないかという考えにたどりついた。

「鑑賞シート」は、学校で活用できる教材として生まれてきたものである。けれども、それがどんなに教材らしい姿として登場してきたとしても、教材は実践者となる教師の解釈を経なければ真の意味での教材⁸⁾にはならないのである。参加者の多くは、美術作品を対象とした鑑賞の授業を初めて見たという教員がほとんどであり、鑑賞シートの活用経験者も数名しかいなかった。このような実態を持つ教員が、ある教室の子どもたちのために特化された鑑賞シートの活用実践を見ても、それだけでは学級の中で価値ある教材として活用できるのかどうかをイメージしたり判断したりすることは難しかったであろうという反省が残った。そして、研究会の在り方も、美術館という土壌で育まれてきた鑑賞シートを学校現場に普及させていくといった一方的なものではなく、学校と美術館という二つのフィールドで鑑賞シートを真の教材として発酵させていくような双方向の研究の場にしないかという課題が見えてきた。

「シーがえるたアートスクール」という愛称には、この課題に向かって、研究会スタイル一新しようとする、企画者の思いが込められている。美術作品との出会いから「相互の学び合い」が生まれる鑑賞遊び「シーがる・た」⁹⁾に因み、「シーがえるたアートスクール」と呼ぶことにしたのである。

IV. 「シーがえるたアートスクール」の実際

1. 授業研究会のサイクル

鑑賞シートが真の教材として醸成するための、双方向からの発酵作用が期待できるワイナリーのような研究の場、それは「教材研究の場」と「実践から学び合う場」ではないかと考え、図1のように鑑賞シートの教材研究会→各学校での授業実践→鑑賞シートを活用した授業実

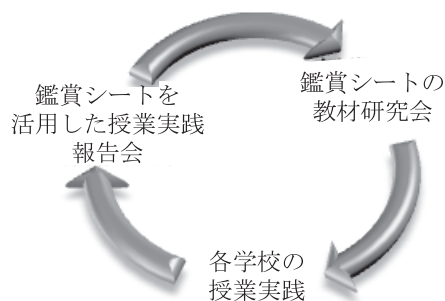


図1 授業研究会のサイクル

「**実践報告会**」といったサイクルが生まれる研究会に取り組んでいくことにした。

そして、**鑑賞シートの教材研究会**と**鑑賞シートを活用した実践報告会**は、「シーがえるたアートスクール」の授業として行い、**各学校での授業実践**は、「シーがえるたアートスクール」からの宿題として、それぞれの学校や学級の実態に応じて実施するという長期スパンの計画で取り組むことにした。また、参加者もこのサイクルを通しての研究に理解を示してくれた教員に限定することにした。

2. シーガルシートの教材研究会

①教材化のための模擬授業

横須賀は、教材を氷山の水面場に出ている一部分であると例え、「水面下には、水面上の氷塊をはるかにしのぐ規模の氷塊が隠されているのである。(中略)教材研究とは、この水面下の塊に下りていき、教材が隠し持っている文化的な価値を探りあてる仕事である。」¹⁰⁾と述べている。

では、どのようにして、鑑賞シートの水面下に下りていけばよいのだろうか。研究会の企画者たちは、鑑賞シートの開発者でもある。つまり、鑑賞シートの水面下の氷塊と格闘してきた教材研究の先駆者でもある。だからといって、開発までの道のりを一方的に教授しても、それが教材

研究になる訳ではない。教師自らが、鑑賞シートに蔵されているものを探り、自得していかなければ、やはり真の教材にはならないのである。

そこで、「2007-1 シーがえるたアートスクール」(表2)では、この年に発行された「鑑賞シート6 世界の美術 シーガルの人間像」を使って、子どもになってシーガルの作品鑑賞を体験してみるという模擬授業に取り組むことになった。1時間目は、学校での授業と言う設定で「教室でシーがる・た」を筆者が

表2 2007-1 シーがえるたアートスクール

実施日	2007年10月9日			
会場	徳島県立近代美術館			
参加者	17名			
時間割	時間	活動内容	担当	活動場所
入学式	14:00～ 14:15	けろり塾長のあいさつ 在校生と新入生の対面	けろり塾長 (森学芸員)	アトリエ
1校時	14:15～ 14:50	教室でシーがる・た (模擬授業)	ガマ先生 (濱口教諭)	
休憩				展示室
2校時	15:00～ 15:40	美術館でシーがる・た (模擬授業)	ケロ先生(竹内学 芸員)・ガマ先生	
休憩				アトリエ
3校時	15:50～ 16:00	テスト(今日の活動のふり かえり)	ガマ先生	
帰りの会	16:00～ 16:10	ケロ先生からの宿題 次回の日程	ケロ先生	

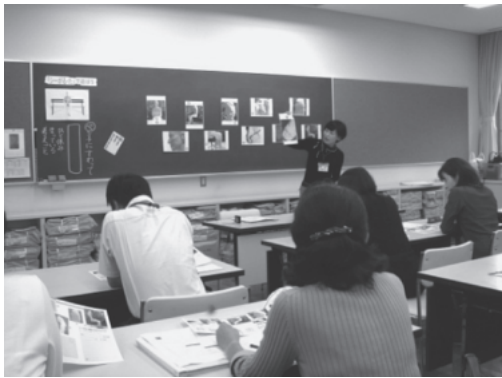


図2 教室でシーがる・た



図3 美術館でシーがる・た

教師役となって行った。シーガルの彫刻を様々な方向から移した写真を絵札に見立て読み札をつくったり、「『かちかちになっちゃった だから涙ももうでない』は、何番を絵札してつくった読み札でしょう?」といった相互鑑賞に取り組みながら、鑑賞シートの基本の流れに添って進行していった。

2時間目は、美術館での授業を想定した「美術館でシーがる・た」である。教室の活動で身につけた作品との関わり方を活かしながら、展示室にある全ての美術作品を絵札にして活動していった。まずは、二つのグループに分かれ、それぞれの展示室で見つけた「自分のお気に入り」を絵札にし、読み札をつくっていった。次に、展示室を入れ替わり、相手チームの読み札を手にしながらかその絵札であろうと思われる作品を探していくといった対抗戦スタイルの「シーがる・た」に取り組んだ。最後の確かめ合いの活動では、読み札と絵札とのつながりを選者の立場から語ったり、読み札を書いた本人からの解説を聞き合ったりしながら、互いの見方を交換し合った。

②模擬授業から得たもの

表3の資料は、テストとして実施した振り返りシートに記された参加者の感想をまとめたものである。スクール生として参加した教員たちが、このような体験的な教材研究の場から、鑑賞シートが隠し持っているどのような価値を探ることができたのかを検討する。

まず、「授業で難しかったこと」として、読み札をつくる時「他者」や「読み札の出来映え」を意識してしまったことが「見ること」への障害になったとする感想を半数近くの参加者が記している（一重の下線を記した）。これは、「絵を見ることを追い越して、意味を決めたり解釈をもんだりしてしまいがちな、大人の鑑賞姿勢」¹¹⁾と指摘した竹内の言葉にも通じるものであろう。そこを「活動の難しさ」として反省的に捉えていることは、「見ること」が何より大切にされなければならないという鑑賞学習の要を体験的に学び取った証であると言えるのではないだろうか。

「鑑賞遊びをして発見したこと」や「授業で難しかったこと」の記入欄には、相互鑑賞の活動から生まれる「自分の自信作をびったりあててもらえると嬉しい」や「同じようなことを感じ

表 3

スー ル生	<ul style="list-style-type: none"> ・1時間目の授業で難しかったこと ・2時間目の授業で難しかったこと 	鑑賞遊び（シーがる・た）をして発見したこと
a 小学校 教諭	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の思うように読み札を作ったので、難しくはありませんでした。けれども、ある女の人の日記（シーガルシートP3「シーがる・日記にもチャレンジ！ — [引用者註]）づくり面白そうだったのでやってみてみたかったです。 ・相手にわかってもらえるように、<u>すぐにはわからないようになどの加減をとったりいいのか、とらなくていいのかなど余計なことを考えてしまった点が難しかった。</u> 	<p>子どもの気持ちを再確認できたこと。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の自信作をびったりあててもらえるとうれし... ・自分と同じ気持ちで作品を見た人がいる喜び... ・へえーそんな見方もあるんだへという新鮮な感覚を得ることができた。今日の体験を胸をはって子どもたちに伝え、<u>自分なりに鑑賞することの大切さを教えたい。</u>
b 小学校 教諭	<ul style="list-style-type: none"> ・難しいというよりは楽しい活動だった。<u>同じ感じ方をした人もあれば違う感じ方をしている人もあるということがよくわかった。</u> ・難しいというか楽しいのだけ絵札をさがすこと（他の人がいろいろ感じてつくった読み札なので少し難しい） 	とても楽しい活動である。読み札から絵札をさがしたり、作品から読み札をつくる時に、 <u>しっかりと作品を見つめることができる。</u> 読み札をつくる時には、自分の感じ方を読み札に表現して思いを込めている。
c 小学校 教諭	<ul style="list-style-type: none"> ・とくに難しいとは感じませんでした。もっとうどん読み札をつくりたいと思いました。 ・当てるのは難しかったです。時間をおくと違う絵を選びたくなりました。違う札をやってみたいと思いました。 	<u>今回紹介していただいた鑑賞シート、とても楽しくてすぐに学級で試してみたいと思いました。今、俳句づくりをしているので、五七五で作りたいなあといろいろ想像しました。ぜひ活用してみたいです。</u>
d 小学校 教諭	<ul style="list-style-type: none"> ・読み札づくりをするとき、<u>まわりの人を意識してつくってしまった。</u> ・読み札づくりのとき、<u>あんまりやさしすぎてもいけないし、ぜんぜんわからないのもいけないと考えて作ったところ</u> 	<u>このような形の授業ができれば、きっと子どもたちは楽しくて仕方がないと思う。</u>
e 小学校 教諭	<ul style="list-style-type: none"> ・読み札づくりが最初難しかったのですが、一つできると楽しくなって次々とできました。 ・読み札を当てる活動が少し難しかったのですが、<u>当たっても外れてもなるほどと思えて楽しかったです。</u> 	<u>1時間目も2時間目の方も当たってもはずれても、他の人の考え方や意見を聞くのがとてもおもしろかったです。心も体も解放されて子どもたちとこのような活動ができたら楽しいだろうなあと思いました。</u>

f 小学校 教諭	<p>・どれも楽しかったです。強いて言えば、読み札づくりかな（！？）<u>子どものような純粋な目で作品と向き合うことの大変さ、大切さを知りました。</u></p> <p>・絵札当てで、自信をもって選んだんだけど……。いろいろな見方、感じ方があることを知りました。</p>	<p>1枚の絵、<u>一つの作品をじっくり真剣に見ることができ、時間があつという間に過ぎていってしまいました。</u>楽しかったです。<u>学級の子どもたちとこんな授業ができたらいいな〜</u>と思いました。今日はとびいりで参加させていただきありがとうございました。これからもよろしくお願いします。</p>
g 小学校 教諭	<p>・読み札づくりは、<u>はじめのうち言葉を選んでしまつてつくりにくかったです。</u></p> <p>・絵札探しは、自分がイメージする絵がなかなか見つからず難しかったです。</p>	<p>なんとなく順番に見ているうちに、<u>自分の中で感想をもったり発見したりすることがあつておもしろかったです。</u>かるたづくりをしているうちに自然と好きな作品ができていました。</p>
h 小学校 教諭	<p>・子どもの気持ちができる人に変身するのが一番難しかった。変身したら、思ったことを口に出せるようになった。</p> <p>・相手チームに答えを分からなくさせようとする大人のいやらしさが出たとたんに、<u>読み札づくりを深く考えてしまい子どもらしい楽しい読み札づくりができなかった。</u></p>	<p>子ども心をもつ。つかむ。教師自らが楽しむこと。</p>
i 中学校 教諭	<p>・特にありません。</p> <p>・なかなか相手の思う作品を見つけられなかったこと</p>	<p>学校の授業の中では、大きな目標があつて子どもたちの意見もいろいろ聞かすが、目標を達成させるために使える意見だけを取り上げて行っている。<u>今回の場合は全ての意見が紙に残りその後も使われるので自分の意見を出してよかったと全員が思えるし、達成感もあると思つた。</u>また、<u>わかつてもらえても、もらえなくても楽しいというのがよいと思つた。</u></p>
j 高等学校 校教諭	<p>・みんなの前で発表するにはちょっと勇気が必要だけどみんなで作るのも楽しいし、グループでわいわいやれたらもっと楽しいのではないかと思つた。</p> <p>・楽しかった。<u>もう少し時間があれば全部の人の意見（考え）を聞きたかつた</u></p>	<p>作品をかた苦しくみるのではなく具体的なイメージやストーリーが生まれてきて 楽しかった。自分が読み札を考えるのも、もちろん楽しい活動であつたが絵札あてとその答え合わせがとっても楽しかつた。</p> <p><u>同じようなことを感じてくれる人がいることの喜び、思いもよらぬ見方に出会えておどろきがありとてもすてきな活動だと実感した。</u></p>

てくれる人がいることの喜び、思いもよらぬ見方に出会えた驚きがありとてもすてきな活動」といった共感への喜びや意見交換の楽しさを述べている者もいる。(点線の下線を記した)。これは、「カルタ」という遊びの手法を鑑賞活動に組み込むことで創出してくる「伝え合う場・認め合う場」に対する評価でもあろう。

また、「見る」という行為を自覚的に受け止めて活動していたと思われる記述 (一点鎖線の下線を記した) や授業実践への意欲や構想計画を綴っている感想 (波線の下線を記した) などから、シーガルシートが鑑賞教材として目の前にいる子どもたちにも十分活用できる教材であるということを判断していたと考えられる。

③ 授業実践への權を手にする模擬授業

鶴田教諭は、こういった体験的活動が鑑賞シートを使った授業実践に取り組むためのきっかけになったことを次のように語っている。¹²⁾

ただシートを配ってくれて使ってくださいとか、例えばこんな方法がありますという口だけの説明だけだったらよう使わなかったと思います。模擬授業をしてもらったら一つのパターンが入るし、私だったらこうするなあとか、こうしたらいいなあとか自分なりに置き換えたイメージがしやすいんですよ。なかなかうまくはできんのやけど、模擬授業に参加して(実践)するのは、とってもやりやすい。それ(模擬授業)があつて、やってみようと思った。それがなければ(模擬授業がなくても)実践しようと思う人は10人いても2人ぐらいしかいないと思うなあ。

鶴田教諭の率直な感想からは、子どもたちがどのように作品世界を創造し、経験し、理解するのかということを描けない不安や鑑賞学習指導には芸術作品を捉える目が必要だという軋轢があったということが見えてこないだろうか。これは、鑑賞学習指導に不安を抱く多くの教師たちにも通じるものと思われる。模擬授業は、教師自らが全身で作品と向き合うことの心地よさ・難しさを感じることができる活動である。だからこそ、自らのまなざしで混沌とした作品世界を見いだしていこうとする子どもたちへの支援の在り方や授業展開のイメージを抱くことができたのではないだろうか。

鑑賞学習指導に消極的な教師にとって、模擬授業は子どもたちが描いた作品世界に漕ぎ出していくための權を手に入れる有効な教材研究の一つであると言える。

3. シーガルシートを活用した授業実践報告会

① 授業実践報告会から創出した指導方法や課題

シーガルシートを活用した授業実践報告会は、教材研究会から約2ヶ月後に行われた。シーガ

ルシートを活用した授業実践事例を小学校教諭7名、番外編「シーがる・た」として企画者側から2名（濱口・竹内）が発表した。（表4）

個々の実践については、「実践報告集2007」¹³⁾に集録されているため、詳しい内容説明は省きたい。ここでは、それぞれの手によってさらに教材化されたシーガルシートの実践報告を傾聴し報告書を分析する中で創出してきた鑑賞学習の指導方法や課題を3つの視点から整理した。

（1）児童の発達段階に応じた 学習指導の方法の工夫

2年生担任の山本教諭は、「シーがる・た」遊びや「シーがる・日記」の活動を国語科の活動に位置づけた合科的な単元構成したことで、充実した言語活動が生まれたことを報告した。¹⁴⁾同様に、1年生での実践報告をした国友教諭も、「シーがる・た」の活動が国語科の「話す・聞く・書く」といった言語活動を関連させて学習することを提案した。¹⁵⁾未分化な発達段階にある低学年児童のやわらかな感覚を無理なく言葉に置き換え、伝え合う喜びを味わいたいという思いから導き出された低学年を担任する教師ならではの学習指導方法であるといえよう。6年生の脇本教諭からは、「シーがる・た」遊びに評価活動を組み込んだ実践報告があった。¹⁶⁾三種類のカラーシールを使うことで、自己評価や相互評価が無理なく進められる。互いの鑑賞活動を振り返ることのできるこのような評価活動の場は、批評的な観察力も育むことが期待できるのではないかとこの高学年らしい学習展開への提案となった。また、別の彫刻作品との比較鑑賞へと発展させたり、シーガルブログへの投稿を促せたりしている太田教諭の実践報告は、高学年の子どもたちの鑑賞意欲に応える探求的な場づくりのアイデアを分けてくれるものになった。¹⁷⁾

（2）鑑賞を促すための表現活動

シーガルシートという同じ教材を活用したことから、偶発的に比較検証ができるような事例が二つ出されていた。山本教諭は、子どもたちに「この女の子（シーガル彫刻作品）は、どんなところにいるのだろう。作品とお話をしながら、まわりを描いてみよう。」と投げかけ、P1に背景を描く→「シーがる・日記」を書くという活動順序で実践に取り組んだ。そのときの活動の様子を山本教諭は「子どもたちにとって、絵と日記とは一体となってつながっているようで、絵

表4 2007-2 シーがるたアートスクール

実施日 2007年12月22日		
会場 徳島県立近代美術館		
参加者 15名		
実践報告者一覧		
No.	報告者	授業を実践した学校及び学年
1	国友和恵	徳島市昭和小学校第1学年
2	山本敏子	徳島市加茂名南小学校第2学年
3	川田真紀	徳島市川内小学校第3学年
4	山中真紀	徳島市加茂名南小学校第5学年
5	鶴田愛子	徳島市大松小学校第5学年
6	太田裕子	徳島市北井上小学校第6学年
7	脇本正久	吉野川市立川島小学校第6学年
8	濱口由美	番外編「シーがる・た」
9	竹内利夫	各年齢層に「シーがる・た」を実践してみて

を描き上げた子は、どんどん日記を書いていった」と述べている。¹⁸⁾ 一方、3年生で実践をした川田教諭は、「シーがる・日記」を書く→P1に背景を描くと活動順序を反対にして取り組んだ。この実践記録には、「最初は、自分が作品の女の人に名前を付けることに戸惑いやどうしてよいのか分からなかったが、時間と共にどんどん書き出す。」「日記の内容と違う背景になる子どももいた」といった様子が残されている。¹⁹⁾ この二つの実践から、「まわりを描く」といった目と手を使いながらの作品へのアプローチは、全身的な感覚を投入するような鑑賞になっているのではないか。「言葉で表現することが苦手な子どもにとっては、有効な鑑賞方法なのではないか」といった鑑賞を促すための表現活動としての有用性が読み取れた。今後の鑑賞シートの開発や授業実践に、ぜひとも組み立てていきたい課題でもある。

(3) 鑑賞活動の評価

「子どもの鑑賞力を看取る教師の評価力」を今後の課題として提起したのは川田教諭である。川田教諭は、3年生の子どもたちの学びから、「つぶやき」と「カルタの読み札」にギャップのある子どもたちがいることに気づいた。そして、指導者には「作品を見る力」と「見たことを言葉に表す力」のギャップがある子どもを丁寧に看取る力が必要であると述べた。²⁰⁾

川田教諭の「後に残らないつぶやき」への示唆を受けて進めたかのように、竹内学芸員からは「跡に残される読み札」を取り上げるときの注意点として、次の二点が「教師側のNG」として明確に示された。

- ・絵を深く読み込んだカルタばかりほめる。
- ・絵から離れて、作文としてのよさばかりをほめる。

そして、よく見るという感性的な活動と、解釈や意味づけの活動を切り離してはならないものとして体験させることが「シーがる・た」の勘所であると言及した。²¹⁾ 鑑賞学習の本質ともいえる要点を押さえた竹内学芸員の指摘は、状況的な手だてや評価方法などに関心が偏りやすい教師たちにとって、「美術としての学び」を再考させてくれるものになったと思われる。

②個々の実践を傾聴し学び合うことの意義

このような実践報告を聞き合うことについて、脇本教諭は次のように語っている。²²⁾

同じシートを使っているので、よく似ているところがありますよね。これでよかったのだろうかと不安を持っていても似ているところがあると安心します。自分がやったことを確かめられるというのですかね。自分で客観的に判断できなかったことが、やっぱりこれで良かったんだと感じます。反対に失敗したなあと思うこともあります。同じように、そうそうもったこうしたらよかったなというところがあれば、次の活動に生きてきますよね。同じ教材を使っていることで生まれる話しやすさもありますね。研究会があってもシートの場合には自

分がやってきているので、こんなふうにしたんです。って自信のあるところが伝えやすいですね。みんな話されてる表情がすごくいいですね。もっと時間がほしかったというのがよくわかりますね。やってきたことみんなに伝えたいという気持ち。他の研究会では、思ったことがあっても発言できなくて踏みとどまってしまうことがあるけど、みんながやってるから意見が出やすい（出しやすい）。

同じシートを活用した実践を通しての報告会は、脇本教諭のこういった言葉からも、自らの実践を反省的に振り返ることができることや、同じ土俵にたった話し合いとなるため、建設的な意見が生まれやすい土壌が自然に生まれているのが伺える。何より、それぞれの実践を対象化して捉えやすいため、そこから創出される知の共有化や公共化が生まれやすくなると考えられる。

V. スクール生の変容から見る「2008 シーが e る た アートスクール」

研究会の活動内容は異なるが2008年度も、2007年度からの鑑賞シートの教材研究会→各学校での授業実践→鑑賞シートを活用した授業実践報告会のサイクルが継続して編まれていった。スクール生たちの鑑賞学習指導に対する姿勢や実践力の変容に着目し、鑑賞シート7現代の木版画「吹田文明の色と光」（以下吹田シートと記す）を使った2008年度の授業実践報告の整理をしていく。

1. 鑑賞教育の推進者として発信

今回の実践報告は、図工部会や校内の教員を対象とした授業研究会や、保護者参観日といった公開の場での実践が目立った。脇本教諭は、吹田シート活用授業を校内における研究授業として公開している。絵の見方を揺さぶるような一人の児童の発言（脇本教諭の言葉では、「ヒットの発言」）がきっかけとなり、絵の見方がどんどん深まっていく相互鑑賞の場が生まれたそうである。脇本教諭は、その後、遠足の機会を利用して、子どもたちと吹田文明作品展「徳島

表5 2008-2 シーが e る たアートスクール

実施日	2008年11月15日	
会場	徳島県立近代美術館	
参加人数	35人(県内外からの見学者を含む)	
No.	報告者	授業を実践した学校及び学年
1	脇本正久	吉野川市川島小学校第5学年実践報告
2	鶴田愛子	徳島市大松小学校第5学年実践報告
3	太田裕子	徳島市千松小学校第6学年実践報告
4	山中真紀	徳島市加茂名南小学校第5学年実践報告
5	細井聡子	徳島市北井上小学校第4学年実践報告
6	川田真紀	徳島市川内南小学校第3学年実践報告
7	山本敏子	徳島市加茂名南小学校第2学年実践報告
8	宮城佳恵	徳島市新町小学校第3学年実践報告

のコレクション2008-Ⅳ（現代版画コーナー）」に訪れ、竹内学芸員と一緒に学ぶことのできる活動の場を設けている。活動のまとめとして書かいた一節の中に「子どもたちと一緒に、楽しみたいという思いから始めたのだが、知らず知らずのうちに吹田作品の魅力に、はまってきたような気がしている。これも、この鑑賞シートを使って実践したご褒美だと思う。」という文面を見つけた。鑑賞学習の楽しさを子どもたちよりも学び取ったのは、脇本教諭ではないかと思われられる一文である。また、そこに記された詳細な授業記録や子どもたちの活動記録（作品・感想）は、今後も貴重な資料として、私たちに多くの示唆を与えるものになるであろう。²³⁾

山本教諭は徳島市小学校図画工作研究会で、題材名「耳をすませてたんけんしようく鑑賞」の授業を公開している。この授業には加茂名南小学校における研究テーマ「言葉を大切にし、自分の思いや考えを豊かに表現する力を育成する」が据えられており、国語科との関連も大切しながら実践に取り組まれていた。子どもたちから編み出される言葉には個々の背景にある環境や体験が重なっていることや日頃発表の少ない子どもの活躍が目立ったという実践報告の内容に、うなずきながら同調するスクール生も見られた。山本教諭も脇本教諭と同様に吹田文明作品展での実物鑑賞へと繋げ、言語活動の場をひろげている。²⁴⁾ 川田教諭は、親子で美術館に行くきっかけが生まれることを願って、参観日に吹田シートを活用した授業を行った。鑑賞の楽しさを子どもと一緒に体験してもらいたいと、保護者を巻き込んだ「音のかくれんぼゲーム」を授業に組み込んでいた。²⁵⁾

研究会や参観日で公開されるこういった授業は、教職経験の長い教師であってもやはり特別なステージであろう。子どもたちにはもちろんのこと、参観者にも伝えたいメッセージを含ませて望んでいるのではないだろうか。特別な日を鑑賞学習の授業日に設定したのは、鑑賞教育推進者としての気持ちを少なからず抱いていたからであろう。

2. 環境や教師の個性を活かした実践報告

身近な環境を活かして吹田シートの授業展開構想した創造的な実践報告も目に付いた。美術館でなくでも実物作品の鑑賞ができることに気づかせてくれたのは、細井教諭である。

「鑑賞シートの学習後、児童に本物の吹田作品を鑑賞させたいと考えていたところ、校長や職員が何枚か持たれていたのので、それをお借りすることにした。本物の作品に出会い、その迫力を感じ取ることができたし、それらの作品はもちろん、線や形の繊細な部分までじっくりと見ることができた。」

そう、記されていた実践記録には、実物の吹田作品鑑賞から生まれたかくれんぼ詩〔図4〕と一緒に綴られていた。²⁶⁾ 太田教諭は、持ち前のカリキュラムデザイン力を発揮した合科的単元を構成していた。吹田作品からのイメージを身体や楽器をつかって表現する音楽での音づくりへ

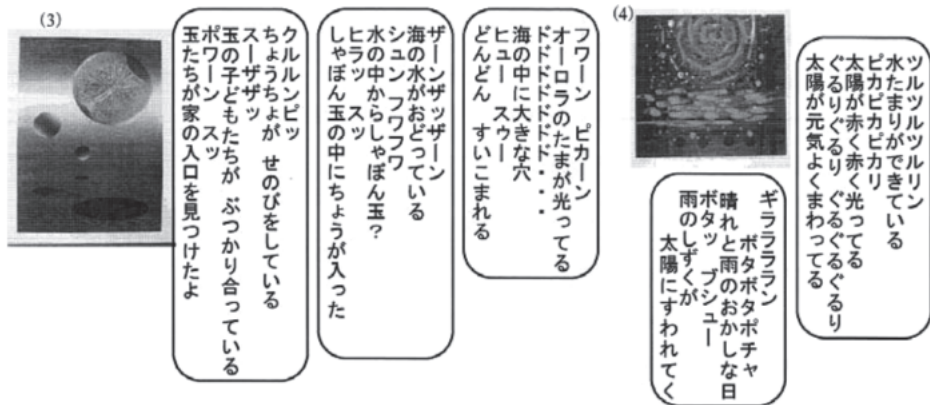


図4 校長先生が持っていた「吹田作品」と音のかくれんぼ

と繋げると共に、作者や制作方法に対する児童の興味や関心を美術館のWeb番組「アートクイズ吹田文明さんの世界に挑戦」を活用するといった探求的な学習の場へと展開させている。²⁷⁾ 山中教諭は、学級児童27名の感想を丁寧に取り上げた実践報告を作成している。²⁸⁾ 一人一人の感じ方考え方に寄り添おうとする教師のこのような姿勢は、子どもたちの主体的創造的な鑑賞体験を導びき、個々の鑑賞世界を確立させていくためのもっとも大切な学習支援であることを再確認させられた。

共同体の学びの場で蒔いた種が、それぞれの教師力によって個性的に咲かせられ、新しい実りの種となって、再び共同体の学びの場に戻ってくる。研究会のサイクルは、こうやって学びのサイクルも実現し、鑑賞学習の授業を協働的に探求していく教師と学芸員のコミュニティを創造していくのである。

Ⅵ 教材研究の新たな試みが始まる「2009 シーがeるたアートスクール」

2009年度は、切り取ることで見える世界を創造していく「メチからスコープで切り取ろう」という鑑賞方法を軸に構成されたラウンドアート作家大久保栄治の写真作品の鑑賞シート（以下大久保シートと記す）を活用した授業実践を目標に取り組んだ。この鑑賞シートは、大久保が1998年の春から冬にかけて、四国霊場八十八カ所を道しるべに徒歩でまわりながら制作されたものである。そこで「2009-1 シーがeるたアートスクール」は、遍路道の風を感じながらの研究会にしようということで、校区に八十八カ所の一番1札所「霊山寺」があり、かつ筆者の勤務校である鳴門市板東小学校で実施することにした。

そして、相互成長してきた参加者の意識や課題に応えるかのように、新たな教材研究への模索がこの研究会（表6）から始まってきた。

1. 鑑賞活動から表現活動へ

新たな手法の教材研究として、まず取り組んだのは、鑑賞シートの発展学習に位置づけた「身近な自然の中(校庭)のランドアート」である。〔図5・6〕図工の時間なら「造形遊び」と呼んでいるこの活動も、ほとんどのスクール生が初挑戦であったことから、鑑賞活動から表現活動へ繋げるための教材研究として体験的に取り組んだ意義は大きかった。しかも、この活動は、「見る」という行為を「つくる」という視点から捉え直す貴重な鑑賞の場にもなっていた。そのときの筆者の活動記録を参加者の感想として載せておきたい。

「プリントされたそれぞれの作品を見ていると『ブランコの下には子どもたちの靴底で

表6 2009-1 シーがえるたアートスクール

実施日 2009年8月1日			
会場 鳴門市板東小学校			
参加人数 18名			
時間割	時間場所	活動	担当
朝の会		あいさつ・出席	
1校時	9:30-9:50 図書室	大久保シート活用した実践報告	がま先生 (濱口教諭)
2校時	9:50-10:40 運動場 パソコン室	「メチからスコープ」をつかってランドアートに挑戦(模擬授業Ⅰ)	がま先生 (濱口教諭)
3校時	10:40-11:00 図書室	四国路を歩いた大久保英治の世界	けろり塾長 (森学芸員)
4校時	11:00-11:30 図書室	「メチからスコープ」で作品を鑑賞しよう(模擬授業Ⅱ)	けろり塾長 けろ先生 山木先生
休憩			
5校時	11:40-14:00 板東の町	遍路探索(一番さん)	自由参加



図5 校庭でメチからスコープ
「坂東家の夏休みだ〜〜ん」



図6 校庭でメチからスコープ
「忍びよる・・・」

何度もドローイングされた痕跡があること』、『タイヤのトンネルの向こうに別の世界（ミクロコスモス）があること』などを発見したスクール生たちの得意げな顔が浮かんでくる。そして、スクール生たちのランドアートも子どもたちの「シーがる・た遊び」も、「～を見る」ではなく「～が見えた」という自分の存在を確かめている同じ行為なのではないだろうか。』

活動後、森学芸員から「四国路を歩いた大久保英治の世界」という講義を受けた。その講義からは、「各国のランドアート・作家プロフィール・四国での制作活動」といった学芸員ならではの知見を共有させてもらうことができた。同時に、それは、大久保英治と自分たちとの活動の違い、さらには造形遊びをコンテンポラリーアートとの比較から照射させるきっかけを与えてくれるものにもなったと思われる。

2. 子どもを活かす評価活動

『メチからスコープ』で作品を鑑賞しよう』は、子どもの活動や作品に対する教師の評価方法を探るために実施した模擬授業である。これまで、学習者の自己評価や相互評価は、脇本実践などから具体的に学び合う機会が生まれていた。しかし、子どもを看取る教師の評価については、川田教諭や竹内学芸員からも課題として提案されていたものの、実践報告からは具体的な評価方法が見えてきていなかった。そこで、「子どもたちに返す、子どもたちを伸ばす評価の方法」を模索していこうと、自分たちのランド



図7 子どもたちに返す、
子どもたちを伸ばす評価の方法

ドアートの写真作品と一緒に鑑賞しながら取り組んだ。三つの活動目標ごとに教師役も交替しながら、互いのやりとりを交わし合う中で次の三つの評価方法を具体的に示すことができた。

- ・活動プロセスを振り返りながら作品を評価する。
- ・作品に対する子どもの考えを聞きながら、製作者である子どもと一緒に作品に価値を与えながら評価する。
- ・それぞれのよさを認めながらも、さらに高次へと引き上げるために提案型の評価をする。

互恵的な学び合いの多い「実践報告会」に比べると、これまでの「教材研究会」は企画者からの発信がどうしても多くなっていた。それは、企画者が「鑑賞シート」の開発者であることにも起因していたのだが、今回の試みは「シーがるたアートスクール」の教材研究方法を新たな方向へ向かわせていく共創的な学びを感じた。そして、スクール生も企画者たちと一緒に鑑賞教材開発や研究会の在り方を模索していくようなコミュニティへの転換期を迎えているのではな

いかという次なる課題を見いだした。

3. 「展示室題材発掘探検」

共創的な学びの楽しさをさらに実感できたのが、1月8日に開校された「シーがえるたアートスクール」での「展示室題材発掘探検」であった。まずは、学習者となる学年を想定し、その子どもたちにとって価値のある題材と鑑賞方法をペアになって検討していった。系統性を考え、子どもの発達段階に即したものという難題ではあったが、6組のペアから「ナイトミュージアムでお話が聞こえてきた」「友達になれそうな人は」「私は影武者」といった題材がそれぞれに提案された。これまでの、「シーがえるたアートスクール」での教材研究は、すでに教材の形となっている鑑賞シートを、授業実践を前提にして研究するものであった。しかし、この「展示室題材発掘探検」は、教材づくりのために教材研究であり、鑑賞ソースの宝箱でもある美術館ならではの教材研究であろう。「シーがえるたアートスクール」の今後の課題としても、さらに発展させていきたいと考えている。



図8 ペアになって展示室題材発掘探検

Ⅶ おわりに

本稿では、2006年から2009年までの徳島県立近代美術館鑑賞シート活用授業研究会の取り組みについて述べてきた。特に、「シーがえるた・アートスクール」と呼ぶようになった2007年からの取り組みを、教員と学芸員のコミュニティを創造してきた具体的な研究会事例から検証してきた。

「シーがえるた・アートスクール」は、1年に2回の登校日しかない自主研究会であるが、美術館に教員と学芸員が集い、骨太の研究会サイクルを毎年動かし続けている。草の根的な研究会の取り組みではあるが、模擬授業を受けたほとんどの小学校教員が鑑賞シートを活用した授業実践に取り組んできたことや、同じ鑑賞シートをつかった実践を傾聴し合あうなかで固有の知を共有化し新たな知の創造を実現してきた教員と学芸員の協働的な学びが生まれてきたことは、「鑑賞学習指導に不安を抱える教師の研究・研修の機会」を計画する上での指針となるであろう。

よって、教員と学芸員がコミュニティを創造しながら活動がサイクルしていく「シーがえるた・アートスクール」のような鑑賞学習の授業研究会を、学校現場における鑑賞学習指導に対する

戸惑いや落差を軽減させるための一つの方法として提案する。

註

- 1) 世田谷美術館の先進的な教育普及活動については、山木朝彦『美術館と学校が連携して進める美術鑑賞教育の実践的方法論の開発』（科学研究費成果刊行物 基盤研究C16530599, 2007年, pp.55-65）において、世田谷美術館当学員塚田美紀氏へのインタビューの内容を通して詳しく紹介されている。世田谷区教育委員会の主催で始まった「美術鑑賞教室」は、1986年の開館依頼毎年8000人に及ぶ子どもたちを世田谷美術館に迎え入れている。
- 2) 岡山県立美術館国吉康雄教材開発研究会『美術鑑賞ガイド』（同会），2006年
岡山県立美術館国吉康雄教材開発研究会は、岡山県立美術館特別展『国吉康雄』開催（2006）に先立ち、福武文化振興財団から助成を受け、鑑賞教育に積極的に取り組む岡山県下の中学校の美術教諭や大学研究者らの協力で組織された研究会である。
- 3) 柴田和豊，「鑑賞教育再考」『美育文化』第58巻第6号（美育文化），2008年，p.13
- 4) 山木朝彦，前掲書 p.115
- 5) 日本美術教育学会『図画工作科・美術における鑑賞指導についての調査報告－2003年度全国調査結果－』（同会），2004年，pp.3-5
- 6) 「徳島県立近代美術館鑑賞教育推進プロジェクト」は、美術館と学校を結ぶ鑑賞教育の実践的研究を行う研究会で、2002年7月の発足以来、月1回程度の会合を開きながら活動を続けている。鑑賞教育を積極的に推進する学芸員・研究者・教員で組織され、実践や研究の交流のほか学校の授業で使う鑑賞補助教材「鑑賞シート」の作成に取り組んできた。これまでに作成された9種類の「鑑賞シート」とその指導の手引きは、同プロジェクトの成果である。
- 7) 濱口由美「27の鑑賞プロセスを生み出す授業の創造」『美育文化』第59巻第5号（美育文化），2009年，p.21
「鑑賞遊び」というネーミングは、様々な研究や実践発表で使われている言葉である。ここでの「鑑賞遊び」は、筆者が創造してきた「『作品とのかかわり方』を学習課題に示し、自立的な活動を促していく」ことに重点をおいた鑑賞方法を指している。
- 8) 横須賀薫『教材研究の仕方』（あゆみ出版），1981年，p.13 横須賀は、「教材は、（それがどんなに教材らしい姿をとって私たちの目の前にあろうとも）教師の手を経るのでなければ、真の意味で「教材」とはならないのだ、と考える。つまり、教材研究を通過することなしに、教材は教材としての働きを持たない、教材可能性にとどまっているのだと思うのである。」と述べている。
- 9) 「シーがる・た」は、「鑑賞シート6 世界の美術 シーガルの人間像」（徳島県立近代美術館鑑賞プロジェクト作成，2007年）のプログラムを構成していくために考案された鑑賞遊びである。シーガルの彫刻を様々な角度から見た写真を絵札に見立てカルタ遊びをしていくことからネーミングされた。互いの見方に寄り添うことのできる相互鑑賞が生まれやすい。
- 10) 横須賀薫，前掲書，p.14
- 11) 竹内利夫「各年齢層に『シーがる・た』を実践してみても」『鑑賞シート活用授業研究会実践報告集2007』（徳島県立近代美術館），2007年，p.22
- 12) 鶴田愛子談，2010年8月31日，徳島市大松町 にしおく珈琲店での録音より
本論をまとめるにあたり、それぞれの教師が「シーがるたアートスクール」に取り組んだ姿勢を鮮明にするために、鶴田教諭・脇本教諭の2名からの聞き取り調査を行った。
- 13) 『鑑賞シート授業研究会 実践報告集 2007』（徳島県立近代美術館）2007年

- 14) 同 pp.4-5
- 15) 同 p.3
- 16) 同 pp.16-19
- 17) 同 pp.14-15
- 18) 同 p.5
- 19) 同 p.8
- 20) 同 p.8
- 21) 同 p.22
- 22) 脇本正久談2010年8月30日 吉野川市鴨島町 吉野川市立牛島小学校での録音より
本論をまとめるにあたり、それぞれの教師が「シーがeるたアートスクール」に取り組んだ姿勢を鮮明にするために、鶴田教諭・脇本教諭の2名からの聞き取り調査を行った。
- 23) 『鑑賞シート授業研究会 実践報告集2008』（徳島県立近代美術館）2008年
- 24) 同 pp.31-36
- 25) 同 p.30
- 26) 同 pp.28-29
- 27) 同 pp.22-24
- 28) 同 pp.26-27